

実施にうつされようとしている。

#### 5. その他の活動

①「変わる「ライフサイクル」」(村上隆助教授と連名, 昭和62年度ラジオ放送公開講座「転換期の教育を考える」37-42頁, 名古屋大学, 昭和62年10月)。

②「人格の理論」(久世敏雄編『教育の心理』名古屋大学出版会, 178-191頁, 昭和63年4月)。

③「来談者中心療法」(田中富士夫編『臨床心理学概説』第Ⅲ部臨床的介入——個人心理療法(第10章), 北樹出版, 131-143頁, 昭和63年11月)。

(昭和63年8月27日記)

## 研究経過報告

速水敏彦

名大に着任してのこの一年は前任校とは異なる学部内の慣行や教室内の指導体制にとまどい右往左往してまたたく間に過ぎた。学生時代を過ごした場所であり、勝手知ったるところとたかをくくっていたが12年間も教員養成大学で過ごしたせいか慣れるのに思わぬ時間がかかった。2年前に「教室場面における達成動機づけの原因帰属理論」で博士号の学位を取得し、研究過程での一つの区切りをつけて以来、新しい研究の方向を模索している。だが、上述のような事情もあり、まだ明確な将来の方向を見いだすには至っていない。そのような状況下での遅々たる歩みの研究活動をまとめてみると次のようになる。

#### ① 動機づけに関する研究活動

学習の目標がなにか、何のために学習するのかという達成目標という視点からも動機づけを考えることができるがその枠組みからの研究を昨年度の名古屋大学教育学部紀要第34巻に報告した。その後、この研究を基礎につつ、Dweckの提唱している成績目標、学習目標を核とした動機づけ過程のモデルを参考にして中・高校生の学習動機づけ過程の検討を大学院研究生および大学院生の伊藤篤、吉崎一人両君と進めている。これは Dweck のモデルにかなりの部分修正を加えようとするものでその成果は学会誌に投稿したいと考えている。

以前から行ってきた達成動機づけの原因帰属の問題に関しては先の両君とともに本紀要に掲載したような検討を行った。これまで学業成績の原因帰属が誰にも当然なされるかのように考えられてきたが今回は自発的原因帰属がなされているかどうかに特に着目した。また、昨年の日本心理学会第51回大会で鈴木康平教授を企画者とするシンポジウム「帰属過程の研究——最近の動向と今後

の問題」にシンポジストの一人として「教育事象の帰属過程」について発言する機会を与えられたことは幸運であり、Weiner モデルの限界や今後の発展についてじっくり考えることができた。

他に、村上英治教授の退官記念の書「教育心理学への歩み」(川島書店)で「動機づけ研究の周辺」と題するエッセイ風の論文を書いた。これはこれまでの動機づけ研究者としての自分の足跡を振り返り、これからの自分の研究方向を意識しつつ最近の動機づけ研究の動向を論評したものである。そこに述べたことはこれからの自分の研究課題のひとつであり、そういう機会を得たことは誠に有意義であった。教育雑誌には「学習動機の転換期を考える」(教育研究, 43巻, 3号)を執筆した。

#### ② 教授心理学に関する研究活動

日本教育心理学会第29回総会で北尾・中村との連名で「教授スキル評価の視点に関する検討」を発表した。この詳細は近く教育工学雑誌に掲載される運びとなった。また、同じく昨年の日本教育心理学会のシンポジウム「学力の個別差にどう対応するか」でシンポジストに選ばれた。そこで全く専門外ながら、能力別学力編成の是非について論じるよう命ぜられ、あわててその種の勉強を開始することになったが自分の守備範囲を広める意味で結果的にはよい経験であった。さらに、教授行動に関する「子どもの個性と教師のきびしさ 目標のもたせかた」(児童心理, 41巻, 10月号)も執筆した。また、まもなく発刊される「応用心理学講座9 教授・学習の行動科学」の「学業不振と教授行動」の章を北尾と共に著で分担執筆した。

その他、授業の中で最近よく実施されている自己評価に関してはかねてから関心を抱いていたが本学部の教育

学科の安彦忠彦教授が「自己評価 自己評価論を超えて」と題する書物を刊行され、この書評を書かせていただいた（指導と評価、34巻、1号）。また、筆者自身の

自己評価に関する見解を「やる気を育てる自己評価」（指導と評価、34巻、6号）にまとめた。

## 研究経過報告

石 田 勢津子

1987年4月から11月まで、オーストラリアでの研究に従事する機会が与えられた。この8カ月間、ニューサウスウェールズ州のニューカッスル大学に滞在し、文学部現代語学科、日本語教室に籍を置いていた。オーストラリアでの研究課題の一つは、ニューカッスル大学の日本語コースの受講生を対象にした、日本語に対する動機づけ・イメージに関する縦断的な研究を実施すること、もう一つは、梶田正巳教授らとの共同研究である、国際比較研究の一環としてオーストラリアでのデータを得ることであった。

まず、動機づけに関する縦断的な研究については、日本語教室の主任であるK. O NO教授をはじめとするスタッフの方々の協力によって、2学期の始めと終わりの2回、学生に調査を実施することができた。できれば、もう少し間隔をあけて実施したかったが、ニューカッスル大学では3学期制をとっており、学期の切れ目の実施ということで、一学期間のみとなってしまった。この調査結果は、「日本語学習に対する意識と日本語のイメージ」と題して、本紀要に掲載されている。

次に、共同研究であるが、これはニューカッスル近郊の小学校教師を対象にした、「教え方」の質問紙調査である。被験者を得るために十数箇所の小学校を回ったが、これはオーストラリアの小学校を知る良い機会ともなった。質問紙の回収率は、予想どおり50%程度であったが、十分な数のデータが得られた。この成果も、本紀要に「学習指導様式の国際比較——日本・オーストラリア・韓国——」と題して掲載されている。

さらに、娘がニューカッスルの公立小学校に入学したことから、その小学校でフィールド・スタディを行う機会が得られ、オーストラリアの小学校教育の実際を観察することができた。この体験は、はっきりとした形をとるかとらないかは別にして、今後の私の研究や教育活動に役立つと思われる。

尚、渡豪中にもかかわらず、村上英治先生の退官記念出版の原稿を書かせていただけたのは、幸いであった。

最後に、このような在外研究の機会を与えて下さった教室の皆様に、この場をかりて感謝の意を表します。

## 研究経過報告

都 築 誉 史

ここでは、筆者が助手として本学に就職した今年の4月から、本紀要の締切（8月末）までの経過について述べる。

### 1. 実験的研究

現在、同音異義語の認知と記憶に及ぼす文脈と処理時間の効果について研究を進めている。この問題に関し

て、日本語の表記上の特殊性を重視した観点から行った一連の実験の結果を、昨年度の日本心理学会第51回大会に続いて、本年度の日本心理学会第52回大会（「同音異義語のカナ漢字変換処理に及ぼす処理時間と文脈規定性の効果」）と、日本教育心理学会第30回総会（「同音異義語の漢字変換処理に及ぼす表記文字、処理時間、文脈

規定性の効果」で発表する。(ただし、後者は下記の調査的研究と関連した分析をも含む。) しかしながら、これらの報告は今回の実験データのごく一部を分析したものにすぎず、同音異義語の認知における反応時間(プライミング効果)の分析と、偶発学習課題として同音異義語を認知した後の記憶の諸測度に関する分析が今後の課題である。

## 2. 調査的研究

上記の実験的研究を進めて行く上で、単独で呈示した日本語の同音異義語に関する連想基準表を作成する必要性が生じ、名古屋大学教養部の齋藤洋典助教授と共同研究というかたちで、大学生212名を被験者として調査を行った。この研究結果は、「連想記憶における検索過程：48同音異義語に対する検索多様性に関する基準表」という題目で、本年度の名古屋大学教養部紀要に掲載される。この連想基準表の項目数は決して多くないが、上記の一連の実験で参照した国立国語研究所(1961)による、特定の文脈を被験者に与えた場合の同音異義語の基準表と対応しているという点で、少なくとも筆者の実験結果を分析する際に大きな意義をもつ。

## 3. 理論的研究

筆者は「活性化拡大理論」の観点から、文記憶に関する実験的研究とモデル構成を行ってきた。上記の同音異義語と文脈効果に関する研究は、活性化拡大理論の射程で扱いやすい発展的テーマとして選択したものである。

この理論に関連して、近年、数多くの興味深い論文が発表されている。活性化の概念に基づく最近の理論的な研究動向については、UCLA大学院留学中に執筆した複数のペーパーをもとに、本年度の名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——(本巻)に，“Spreading activation theories in sentence memory, sentence comprehension, and speech production”という題目で論文にまとめることができた。また、同音異義語の認知の問題に対して、活性化拡大理論の一つ(McClelland & Rumelhart, 1981)を適用したコンピュータ・シミュレーションの結果を、本年度の日本認知科学会第5回大会で報告した(「同音異義語の認知における文脈効果に関する交互作用的活性化モデル」)。

## 4. その他

現時点では調査用紙を準備中の段階だが、特定研究「教育の場における相互作用の実証的総合研究」の一環として、南山大学の神谷俊次講師と「学習におけるプランニング技能の発達に関する研究」という題目で、定期テスト前の中学・高校生の学習計画の立案、実行、評価に関する調査的研究を進めている。また、当面の具体的な研究目標としては、上記の実験的、調査的、理論的研究を統合して、活性化拡大理論の観点から、3種類の表記文字が混在するという日本語の表記上の特性を重視しつつ、同音異義語の認知と記憶に及ぼす文脈と処理時間の効果について論文をまとめたいと考えている。